

# アジア陶磁貿易史での台湾の役割

坂井隆（国立臺灣大学芸術史研究所 副教授）

上田：それでは第1報告といたしまして、坂井隆先生、国立臺灣大学芸術史研究所の副教授でおられます。東南アジアの考古学、美術史が専門で、広くインドネシアおよび台湾で出土している肥前陶磁器、中国陶磁器の調査を行っております。ご著書に『「伊万里」からアジアが見える』（講談社、1998年）。そして『港市国家バンテンと陶磁貿易』（同成社、2002年）などの本を出版されております。今回、台湾から起こしいただき、今回のシンポジウムにご登壇いただけることを、私ども本当に光栄に思っております。それでは坂井先生、よろしくお願ひします。

坂井：皆さん、こんにちは。ご紹介にあずかりました坂井と申します。今回のシンポジウムの趣旨に、果たして私の報告がふさわしいのかどうかよく分かりませんが、最初に若干前置きを申し上げます。基本的に大きな差はないですが、お手元の「今日の次第」にあるタイトルと、私が用意した報告のタイトルが少し違います。これから台湾を中心に陶磁器のことをお話ししますが、それには中国陶磁器に限らず他の陶磁器も入れないと分からないので、その点も話すことがタイトルの違いです。

また前置きがもう一つです。ご紹介いただきましたように私は台湾から来ましたが、今現在の研究対象は台湾ではありません。台湾で教えていますが、アジア全体の陶磁貿易史あるいは文化交流史が中心で、台湾自体の情報というのはそれほど把握していません。そのため、もちろん知っていることをお話ししますが、台湾に関しての完璧な報告にはならないことをあらかじめご了承くださいと思います。

このシンポジウムは16、17世紀が中心ということですが、それを中心にするとしても、いきなりそれからというわけにはいきません。私が前座をするので、まずは台湾とはどういふところなのかということを理解していただくために、地理的な枠組みに触れます。そして時期としてはこの中心テーマより古い時代を、前期として申し上げます。今回のテーマの時期で終わりにすると、やはりうまくないので、その後の時代がどうなるかということも少しお話しします。そして最後に簡単なまとめという構成になります。

## 1 はじめに—台湾の位置

最初は、台湾の位置になります。地図で台湾がどこにあるかは誰しも簡単に分かりますが、問題は台湾が何アジアなのかという疑問です。私自身は東南アジアの一部として台湾を教えますが、それを言うと台湾人学生は皆驚きます。

とんでもない、われわれはそんな野蛮地域ではないという反応です。われわれは東アジアだということを言います。今の台湾政府なり、台湾の教育というのは、それを前提にしています。しかし歴史を見れば簡単に分かるように、その認識は今現在については正しいかもしれないけれど、本来的にはそうではありませんでした。

台湾について、いくつか他の地域の関連地を見てみましょう。一つはインドネシアのジャワ島の西端にある遺跡、ティルタヤサ遺跡です。それから別のところで北部ベトナムのフォーヒエンという遺跡が関連してきます。いずれも現在の台湾とは違う場所ですが、この両者は少なくとも陶磁貿易史の観点から台湾とかなりつながっています。

また陶磁貿易史ではないですが、16～17世紀の中で少しお話しするパッタニーというタイ南部の港があります。ここが非常に面白いところで、すぐ隣がマレーシアです。しかし台湾南部のタカオ（高雄、カオシウン）と歴史的につながります。こういう点だけを見ても、台湾が東アジアであるというような認識で捉えていくと全然歴史が分からなくなるの

で、それを中心にお話ししたいと思います。

なお台湾の地名の多くはタカオのように、原住民の地名に由来しています。しかしそれを17世紀以降、主に福建南部の発音に基づいて漢字で表記するようになりました。日本時代の地名の多くはそれによった漢字表記です。しかし戦後国民党が台湾を支配するようになると、今度はそれをカオシウンのように北京語で発音させています。そのため現在の地名呼称の多くは、本来とは全く異なったものが多くなっています。

さて私の後のご報告でより詳しくご紹介されると思いますが、16～17世紀、あるいはそれ以前からも華人の貿易のもっとも大きな起点は福建です。福建からどこへ行くのかということがいろいろ問題になりますが、よく知られている南西方向を目指すのが西洋針路と呼ばれる航路です。これは主にベトナムをかすめてタイへ行ったり、あるいはインドネシアへ向かう航路です。

もう一つはその逆に東洋針路と呼ばれるもので、フィリピンを経てインドネシア東部へ向かう航路になります。これらの西洋針路と東洋針路というのが福建の歴史的な用語としての西洋と東洋の出発点で、現在の一般用語とは意味が全く異なります。海上交流史を中国基点の視点に立つと、西洋と東洋はそのようになります。その分岐点になった場所に小さな島があります。

他に大切な地域として、琉球があります。琉球王国ができた後、あるいは三山分立のときからも同様ですが、福建を目指すいわゆる朝貢船は、大体八重山から台湾北部をかすめて福建へ向かう航路を取ります。この三つの航路の中で、福建人の東洋針路の航路と琉球人の朝貢航路が台湾のあたりでクロスすることがあります。

分岐点の島というのは、澎湖（ペンフー）島です。ここは非常に面白いところで、地理的には台湾本島に近いですが、けれども、少なくとも陶磁器の在り方は全然違います。なおかつ歴史的に見ても、澎湖を少なくとも明の支配者は自分たちの領土だと言っています。福建からはかなり遠いですが、しかしその先の台湾は野蛮人の国で、われわれとは関係ないとされました。中国人の大好きな領土観念からいうと、澎湖は彼らの領土だと早くから言っています。それについては、陶磁器の部分で少しお話しします。

また琉球航路との関係になりますが、台北に近い北海岸に大坌坑（ターフェンケン）という遺跡があり、その近くに十三行（シーサンハン）という重要な遺跡も発見されています。それらの遺跡で出てくる陶磁器は、琉球の朝貢航路と関係があるように感じられます。

二つの遺跡は台北のすぐ近くですが、これから何回もお話するキウラン（淇武蘭）という遺跡があります。これは東海岸の北端にあります。この位置はとても大きな意味があります。台湾の人文地理的關係からいうと、16世紀以降華人が少しずつ移住してきて特に17世紀以降多くなりますが、彼らが基本的に住んだのは西海岸です。東海岸に華人が入ってくるのは、19世紀後半以降になります。このキウラン遺跡というのは華人とは全く関係ない原住民の遺跡です。原住民には多くの民族がありますが、ここはカバラン人たちの遺跡です。それが東海岸北端であることに注意してください。なおキウランとはカバラン語で、それを漢字で淇武蘭と当てており、北京語での発音はチーウーランになりますが、ここでは本来の呼び名であるキウランを使います。

その他東海岸には花蓮（ファーリエン）など重要なところがありますが、少しだけお話しする蘭嶼（ランユイ）という小島は、本島からかなり南東にずれた場所です。17世紀に政治の中心になるオランダが築いたゼーランディア城があるのは、西海岸南部の現在の台南です。この辺のいくつかの地域で重要な陶磁器が出ているので、それもお話しいたします。

台湾は九州より少し狭いですが、西海岸と東海岸でまずかなり違います。そして澎湖という近い位置にある島ですが、これが歴史的には本島とは全く異なっているので、台湾は

大きな三つの部分に分かれることをご了解ください。

その他に国民党政権の移転以来、現在まで台湾政府が支配している金門（キンムン）島というのは中国福建の廈門（アモイ）のすぐ隣にあり、泳いでも行ける距離です。人文的には少なくとも16世紀以前は台湾とは全く関係ないですが、ただ17世紀以降はいろいろ関わりが出てくるので少しだけご紹介いたします。

## 2 前期時代（9～15世紀）

### 2-1 前期1（9～11世紀）

前期の最初の中心は、澎湖です。大きく分けて三つの島が環状に連なっており、サンゴ礁ではないですが、環礁のような地形になっています。後でお話する16世紀の内坵（ネイアン）遺跡と、それから17世紀の風櫃（フォンクイ）遺跡があります。後者から海を隔てた近くの場所が、現在のもっとも大きな馬公（マーコン）という港町です。三つの島に囲まれた内部が内海になっていて、それぞれの島には全く山がありません。山がないので川もない島で、風がものすごく強いところです。

ここで9世紀から10世紀の越（ユエ）窯青磁、浙江省で作られた初期貿易陶磁ですが、これが大量に出ています。相当の量があり、台湾本島でもなくはないですが、量と質はここだけが圧倒的に多いです。これが非常に際立った特徴になります。越窯というのは9世紀に始まる最初の陶磁貿易での重要な種類ですが、それがここで出ているということは、澎湖がすでに唐代後期の時点で、アジア陶磁貿易の大きなネットワークの中に入ったことを示しています。

越窯青磁は日本でも九州で相当数出土していますが、すでに西アジア、アッバース朝の都サーマッラーでも発見されている重要な種類です。ただ、ここで注意しなければいけないのは、初期貿易陶磁というのは越窯だけではなくて、他に中国製のものが2種類あります。まず北方の邢（シン）窯という河北省で作られた白磁、そしてもう一つ長江中流の湖南省の長沙（チャンシャー）窯で作られた多彩釉の陶磁器があります。この越、邢、そして長沙という三つの中国陶磁がセットになって動いていきます。

それに加えて、中国陶磁以外では恐らくイラクか現在のイランで作られた、通常イスラーム青釉陶器といわれるものがセットに加わります。これらがこの時期のアジア各地の陶磁貿易の遺跡では一緒に出てきますが、この澎湖で出てきているのは越窯青磁だけで他は確認されていません。ここが大きな違いで、同時期のフィリピンを見ると、フィリピンではもうこのセットがイスラーム陶器も含めて全部揃っています。それらが入っていないことは、やはり陶磁貿易構造の中での澎湖の役割が少し違っていたということになります。

ちなみにこの時期の貿易を動かしていたのは、中国人は全く関与してなくて、恐らくペルシャ人の可能性が非常に高いです。これにはいろいろな証拠がありますが、今日はそれを省きます。

### 2-2 前期2（12～14世紀）

その後の11世紀から12世紀ですが、台北のすぐ北側にある十三行という遺跡が重要です。この遺跡は、海のすぐ近くにある原住民ケダカラン人の集落と墓地の跡です。ここで中国の竜泉（ロンチュアン）窯青磁がたくさん出ています。またこのすぐ裏山の中腹で、景德鎮（チンドチェン）窯青白磁が出ました。それが大坵坑遺跡ですが、この遺跡自体はもともと歴史時代ではなくて新石器時代の遺跡として調査されました。海からすぐ見える山の中腹で海拔400mぐらいの位置ですが、そこから新石器時代の土器以外にそのような陶磁器も出ました。

これらの事実を見ると、12～14世紀という時代に台湾北端の原住民がそのような陶磁貿

易に深く関わっていた可能性があることが分かります。台湾の他の地域でもこの竜泉窯青磁というのはかなり普遍的に出ますので、これもアジア全体の動きとあまり齟齬がありません。同じ貿易ネットワークに入っていた、ということが分かります。

南東に離れた蘭嶼という小島には、現在タオあるいはヤミ人という原住民だけが住んでいます。この島からは台湾本島が遠くに見えます。しかし実はこの島でも、青磁がある程度発見されています。例えば、福建のどこかの窯で作られた青磁碗がいくつも確認されています。それ以外に重要なのは、ここで高麗（コリョ）青磁が発見されたことです。高麗青磁あるいは韓国陶磁は、基本的に長距離を動いていません。貿易品としては日本に輸出されるのが中心で、それ以外のところへの輸出は非常に少ないです。ただし高麗青磁に関しては、琉球にも運ばれています。

他に私が知っている、もっと離れた地域はハノイです。ハノイのタンロン遺跡はベトナム歴代王朝の首都の宮殿があった場所ですが、そこでも高麗青磁は発見されています。これは陸上で運ばれた可能性が高いですが、蘭嶼は離れ小島で陸はありえないので海上ルートになります。もっとも考えられるのは琉球に持ち込まれた高麗青磁の流れの中で、一部が何かの事情でここまで運ばれた可能性です。これは高麗青磁発見地の最南端になります。

### 3 中期（16世紀中葉～17世紀）

#### 3-1 中期1（16世紀中葉～1623年）

今日の議論の中心である中期に入ります。これまでが12～14世紀で、次は16～17世紀となり、15世紀が抜けます。これが重要な特徴で、典型的な例をご紹介します。

北東部の宜蘭（イーラン）県にあるキウラン遺跡が、そのことと関係します。この遺跡からは北西側の間近に雪山（シュエサン）山脈が見えますが、3,600mぐらいの高さがあります。簡単には越えられない山並みに囲まれた地域で、そのため他地域とは隔離されています。

平野を流れる川の改修で遺跡が発見されたのが第1次調査で、その後行われた高速道路建設での調査が第2次調査になります。ここにはカバラン人たちが、少なくとも16世紀から19世紀までずっと居住を続けていました。なおかつ亡くなった人たちを同じ居住地の中に葬っていた、居住埋葬遺跡です。

ここで発見された墓で有名な墓がM020墓と名付けられました。もっとも注目されたのは、頭骨の近くで発見された陶磁器の皿の隣にある、合計で237枚の中国式銅銭です。丸くて四角い穴が開いた銭を全部調べたところ、多くは北宋銭ですが、年代的に最後に作られたものは朝鮮（チョソン）王朝の朝鮮通宝でした。これは1418年が最初の鑄造年になります。そのため、この年よりは後でもたらされたことになります。ところが、一緒に出た陶磁器は16世紀中葉の福建南部の漳州（チャンチョウ）窯製品です。つまり銅銭は15世紀初めが最も新しいですが、陶磁器は16世紀中葉になり、100年以上差があることになります。

これには大きな意味があります。本来15世紀にはアジアの陶磁貿易は別の意味で活発化していて、その大きな主役になったのが東南アジア陶磁です。それが台湾ではほとんど報告されていません。15世紀の東南アジア陶磁とはベトナムとタイ陶磁が中心で、他にミャンマー陶磁もあります。しかし東南アジア陶磁の台湾での報告例は、この時代ではほとんどないようです。また同じ時代の中国陶磁として日本で呼ばれる染付（青花）が琉球を仲介してかなり輸出されますが、それも台湾では報告例がほとんどありません。ここが前期と中期を分ける大きな空白になります。

ちなみにこの237枚の銅銭は、われわれが普段使っているような流通の道具として機能



図1（左） キウラン遺跡出土の前期ノイ川窯甕／筆者撮影

図2（右） 同後期ノイ川窯甕／筆者撮影

したのではありません。これは銅銭を使った首飾りでした。カバラン人たちの流通の道具というのは中国式銅銭ではなく、玉のような違うものでした。

この墓に入っていた壺は、漳州窯の青花です。そして同じ時期とやや遅れたぐらいの時期の景德鎮青花磁器も、カバラン人のキウラン遺跡に運ばれています。その例として16世紀後半頃の年代で、日本でもかなり入ってくる底が少し持ち上がった種類の碗があります。しかし、これより古い景德鎮陶磁器はありません。このような陶磁器が急に入ってくることに、前期とは異なった時代の変化を見ることができます。

15世紀には東南アジアのタイ・ベトナム陶磁は非常に活発な生産を行って、アジア各地に輸出しました。西アジアでもかなり発見されていますが、同じようことが台湾では起きませんでした。しかし16世紀中葉以降になると、今度は入ってきます。キウランでは、タイ中部のシンブリ製の甕が出ています。シンブリ県のノイ川流域でつくられた釉薬をかけてない大壺です。これは貿易商品の容器で、この中に入っていた品が貿易商品です。貿易商品としての陶磁器ではありませんが、これもアジア各地、特に東アジアでは多く発見されています。

同じノイ川でつくられた甕ですが、16世紀中葉の前期様式だけではなく、16世紀終わりから17世紀の初め頃の後期様式も発見されました（図1・2）。後者もかなり普遍的に運

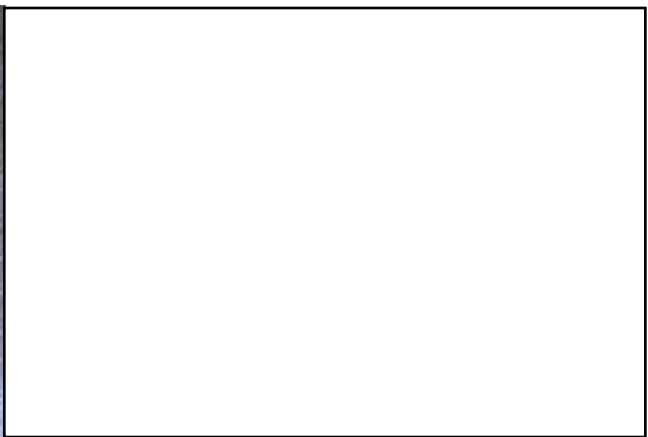


図3（左） キウラン遺跡出土緑釉クンディ型水差し／筆者撮影

図4（右） 澎湖内垵遺跡出土のモン州窯白釉皿／国立歴史博物館2003

ばれて、日本でも大阪の堺などで非常に多い出土例があります。

その頃の陶磁器はとてもバラエティーがあります。例えば、恐らく福建周辺でつくられたと考えられている緑釉陶器の破片が出ています。色が取れていますが、全体に本来は緑色でした。この破片は緑色の釉薬がかかっている軟質陶器で、クンディと呼ばれる水差しです。クンディ型水差しというのは注ぎ口に特徴があり、この時代の紡錘形から次第に乳房形に変化していきます。これはもともとインドネシア市場向けの陶磁器で、それを福建では13世紀頃からつくり始めますが、キウラン発見の破片は16世紀のクンディです（図3）。

そして澎湖島では、ミャンマーのモン人がつくった白釉陶器の皿が発見されています（図4）。今日はあまり詳しくお話しする時間はありませんが、アジア東半分の陶磁器では、ミャンマー陶磁器だけが基本的に全く異なった特徴があります。釉薬の原料が中国的な陶磁器とは異なって、スズを使います。スズを使う陶磁器は、他にイスラーム陶器がよく知られています。そのためミャンマー陶磁器は東南アジアの西端という位置として考えるのではなく、インド洋世界の東端で西のイスラーム陶磁文化と非常に深い関係があったとしなければなりません。そのようなミャンマー陶磁ですが、スズを使った白釉陶器は東にもかなり輸出されています。だからこそ澎湖島で出ていますが、日本でも少し発見例があります。そのように、いきなり16世紀の中ごろから多彩なものが台湾に運ばれてきました。

ただし少し注意を要するのは、台湾は福建の漳州にもっとも近い位置にあることです。漳州で作られた陶磁器は、日本にも大量に入ってきています。また他の東南アジア地域にもかなり運ばれていますが、それが台湾の場合は距離に比べるとそれほど多くない状況があります。確かにカバラン人たちも少し使える程度には、運ばれてはいます。日本では呉須手と呼ばれて茶陶の一種にもなりましたが、大量に輸入されました。他の東南アジア地域でも、この時代の漳州窯陶磁器は山のように出てくる感じですが、台湾の場合そういう雰囲気ではありません。あそこにあるなという程度の出土状況の報告で、膨大な量が輸入されたような状況とは言えないようです。

さてここで話が、タイ南部のパッタニーにあるモスクに飛びます。レンガで造られたモスクで、本来、屋根には大きなドームがかかるはずだったものですが、完成していないモスクです。これは東南アジアで唯一のインド様式のモスクで、インドのベンガル様式の建物です。このタイ南部パッタニーのベンガル様式モスクはクルエ・セという名前ですが、建築の様式とは全く違う話がここに伝わっています。

パッタニーの町の中に、リム・クンイェウ（北京語では林姑娘）と呼ばれている女性が祀られた華人の廟があります。それは誰なのかですが、ここに非常に信じがたい話が伝わっています。16世紀第3四半期頃に台湾海峡周辺で活躍するリム・トキアム（北京語では林道乾）という海賊がいましたが、彼は福建ではなくて隣の広東東端の潮州（チャオチョウ）の出身のようです。この海賊の拠点の一つが、台湾の高雄と言われています。高雄に彼に関係する廟がありますが、この林道乾は結局明の官軍と戦って負けて、高雄の拠点を維持できなくなります。

そしてその後、彼はパッタニーまで逃げるという話です。パッタニーは当時、すでにイスラーム王国が成立していましたが、このときのパッタニーのイスラーム王国は変わっていて4代続いて女性のスルタンでした。その2番目の女性のスルタンに取りいって彼はイスラームに改宗し、このモスクを建てたとされています。歴史的事実としてはこのモスクはベンガル様式なので、明の海賊がこのような建物を造れる可能性は全くないですが、地元の人たちはそのように信じています。

そのときに後を追って、妹である林姑娘というのがパッタニーへきます。兄を中国へ連れ返そうとしますが、彼は全く応じません。そこで兄妹の争いが起きて、結局妹は自殺してしまいます。兄が妹の願いを聞かなかったのが、そのためにできたのがこの廟です。最

期に妹は呪いの言葉として、「あなたが中国へ帰らないのなら、あなたが建てようとしたモスクは絶対に完成しないよ」と告げたと言います。そこでこのモスクは、今現在も完成していないという話になっています。

とても何とも言えない奇想天外なストーリーです。ほとんど荒唐無稽かもしれないですが、明の海賊が台湾とパッタニーを結ぶという話が出てくることに、何らかの史実を反映している可能性を感じます。

### 3-2 中期2（1623～83年）

中期の中心は、1623年以降になります。後でも出てきますが、この年オランダ艦隊がマカオを攻撃して失敗しました。そしていきなり澎湖島にやってきて、東の島で港湾適地を臨む半島の先端の風櫃に要塞をつくりました。これが1623年で、台湾の歴史時代の始まりになります。

現在その跡地には要塞の存在を示す碑だけがありますが、オランダはここには1年程度しかいませんでした。この海岸には、かなり陶磁器の破片が散布しています。そこには、タイのシンブリで作られた容器も含まれています。なぜ1年だけかということ、明の官憲が「澎湖はわれわれの領土だ。おまえたちがいることは認められない。」という立場を示したことで争いになりました。そして最終的に「おまえたちがどうしても貿易拠点を造りたいなら、あそこへ行きなさい。」と明の官憲が勧めたことで、オランダ人が移ったのが台湾です。

「そこはわれわれのところではない。何をやっても自由だ。」と明の官憲に言われたため、原住民のシラヤ人がタイオワンと呼んでいた現在の台南の外れにあたる岬の先端にオランダは要塞をつくりました。澎湖の要塞を壊して、建材を運んで建てたのがゼーランディア城です。現在スケッチなどが残っている部分は1624年に建てたものではなく、もう少し後の建造です。

最終的には内側と外側の二重構造の要塞となり、レンガの城壁には漆喰が塗られていました。漆喰には、梁を支えるオランダ式の大きな鉄の留め具の跡が現在でも残っています。大きな錠のようなものですが、バタヴィア（現在のジャカルタ）にある東インド会社の倉庫にも同じものがあります。

もともとタイオワンといわれていた場所に建てた要塞を、オランダは自国の州の名前を取ってゼーランディアと名付けました。本来の地名のタイオワンが後にもっと広い地域名称、台湾につながっていきます。現在、この地域は安平（アンピン）と呼ばれています。

もっとも古い1635年のスケッチを見ると、典型的な星形稜堡式要塞とその前に接続する台湾長官の官舎（後の外側部分）に分かれていました。その10年後の1645年のスケッチを見ると半島の内側が潟湖であることが良く分かり、狭い半島から延びた水道に面した場所に建てたのがゼーランディア城です。半島の先端にある町がタイオワンと呼ばれた貿易港で、1661年までに長崎に来たオランダ船は皆ここを出港しました。その後はバタヴィアからになります。

ゼーランディア城跡も、狭い範囲ですが発掘調査されています。これから出土した陶磁器をご紹介しますが、まず典型的な貿易陶磁があります。この時期のヨーロッパ向けの貿易陶磁で、通常日本語では芙蓉手と呼ばれる種類が出ています。景德鎮でつくられた良質のものだけではなく、同じ芙蓉手でも福建の漳州窯製品も発見されています。つまり景德鎮であれ漳州であれ、ヨーロッパ人が一番求めたのは芙蓉手の磁器が中心でした。ただし芙蓉手の文様自体は、中国ともヨーロッパの伝統とも全く関係がありません。別の話ですが、本来イスラーム陶器の文様でした。

オランダはゼーランディアの他に、もう一つ要塞を造りました。こちらの方が比較的に残っている、プロヴィンシア城です。ゼーランディアと反対側で、潟湖を越えた対岸の

本土に築いたものです。その後1661年、ご存じのように福建から鄭成功が攻めてきて、1年強の戦いになりました。この戦闘の絵が残っていますが、ゼーランディアよりプロヴィンシアが先に落ちます。そして翌年には、ゼーランディアのオランダ人も結局降伏するという展開が起きます。ただし鄭氏もゼーランディアを居城にして、中国的な城郭を建てたりしていません。

芙蓉手以外のゼーランディアで出ている陶磁器を、少し紹介いたします。例えば恐らく福建の徳化窯あたりでつくられたと思われる染付（青花）磁器で、大きな葉を1枚描いた文様の皿があります。桐一葉文と呼ばれ、桐の葉1枚で天下の秋を知るという詩が右の方に書かれています。

そして日本の肥前の陶器、磁器ではなくて陶器で、普通唐津といわれる食器が出ています（図5）。唐津というのは、肥前地方でつくられた陶器の総称です。種類がとても多いですが、唐津の中で刷毛目二彩大鉢という種類だけが輸出されています。ゼーランディアは日本以外のもっとも近い場所で発見された例ですが、遠い例を見れば、インドネシアのスマトラ北端アチェ地方でも出ています。なぜ唐津の中のこれだけが輸出されたのかというのは重要な問題ですが、なかなか適切な答えはありません。いずれにしろ、ゼーランディアで出土したことは間違いありません。

そしてゼーランディアのすぐ近くで、現在の台南の町の東外れに当たる社内（シェーネイ）という遺跡からは肥前の染付磁器が出ています（図6）。上は輸出主力商品である中国の芙蓉手を模倣したものです。下は主に東南アジア向けにつくられた、荒磯文と呼ばれる種類の碗です。

肥前磁器は台南周辺を中心に台湾にもかなり運ばれたようですが、台湾で最初に認定された日本の肥前磁器は、高雄の左營（ズオイン）遺跡で発見されたものです。中国の染付の文様を忠実にコピーしているため、なかなか識別が難しいものです。特徴のある文様なり、にじみ具合などから判断して認定していかなければなりません。そのため必ずしも今までに発見された数が多いわけではないですが、確実に出土しています。

ここでインドネシアのティルタヤサという遺跡、ジャワ島の一番西外れの北海岸で私が10年近く調査した遺跡ですが、ここでも出てきた陶磁器を紹介します。もっとも多く出てきたのは日本の肥前磁器で、日本以外で最高率の出土遺跡になります。日本の肥前磁器が大体半分、残りは中国磁器です。その中で中国の景德鎮青花（染付）の重要なものに、裏に3文字が書かれている皿があります（図7）。1字が健康の康であることは誰しもすぐ分かり、その上の字に月のような部分が見えます。そのため他の例から考えて、これは清朝の康熙年間につくられたので「大清康熙年製」と書いてあることはほぼ確かです。

康熙年間は1661～1722年で、康熙帝の在位は非常に長いです。そのいずれの年も製作年



図5（左） ゼーランディア城跡出土の刷毛目二彩手唐津鉢／筆者撮影

図6（右） 台南社内遺跡出土の肥前染付／筆者撮影





図7 (左) ティルタヤサ遺跡出土の「大清康熙年製」銘景德鎮青花／筆者撮影



図8 (右) ゼーランディア城跡出土の「大清康熙年製」銘景德鎮青花／筆者撮影

の可能性があります。しかし1682年にティルタヤサ遺跡はオランダに攻撃されてなくなってしまいます。逆に、人が住み始めた年は1663年で、康熙でいえば3年ぐらいになります。つまり康熙年間の前半しか、ここには人が住んでいませんでした。それから考えると、この陶磁器はその年代の製品である可能性が高いことになります。

また調査地点によってパーセンテージは少し違いますが、だいたいこの遺跡で出土した陶磁器の半分ほどが中国陶磁です。1663～82年という期間に中国陶磁がここに運ばれたことは、極めて不自然な状況です。なぜなら、このときに清朝は遷海令という貿易禁止令を実施しています。あらゆる海岸部の住民を全部内陸へ強制移住させて全く海へ出させないし、貿易もさせないという法令です。その目的は、台湾にいる鄭氏の首を締めるためでした。

このティルタヤサ遺跡出土の磁器というのは、まさしくその遷海令時期の製品になります。にもかかわらず、その時期の中国陶磁がここで出ています。そのため遷海令がどのくらい実際に実施されたのか、ということが非常に問題になります。

ティルタヤサの離宮跡はオランダが描いたスケッチによれば、四稜郭的な感じになっています。これはオランダが攻撃したときの絵で、1682年の状況を示しています。この地域にはもともとバンテンというイスラーム王国がありましたが、その前年から内乱が起きました。スルタン親子の間での争いで、息子がオランダについてオランダと一緒に父親のいたティルタヤサ離宮を攻めます。その陥落が、この遺跡の最後の時期になります。

もう一度ゼーランディアに戻りますが、ゼーランディアで出ている青花にももっとはっきり「大清康熙年製」の文字が書かれた破片があります(図8)。ゼーランディアは使用期間が長いため50年近い康熙年間のいつかを特定することはできませんが、ゼーランディアでも確実に康熙年間に生産された陶磁器が運ばれていることになります。ティルタヤサ遺跡で出てきたものに似ているというのは、ここから運ばれた可能性が非常に高いことになります。それは鄭氏が占領していた時代と考えられます。

また厦門の近くの金門島で出ている陶磁器には、桐一葉文が描かれた可能性が非常に高いものも含まれています。詩が書いてあり傍に印があって、その反対側に桐の葉があります。厦門島と金門島は、1670年代には鄭氏が再占領しています。

この時期、中国では三藩の乱というのが起きました。その1676年から80年という期間は鄭氏が金門と厦門にいて、中国とやり取りする可能性がありました。先ほどのティルタヤサの「大清康熙年製」と書かれた景德鎮青花磁器は、おそらくこの厦門・金門からゼーランディアを経由して運ばれたと考えています。

### 3-3 安平壺の用途と運び手

この時代のもう一つの重要な陶磁器として、安平壺という陶磁器があります。これは台南のゼーランディア城のある安平で最初に発見されたため、そのように呼ばれています。キウラン遺跡でも大量に発見されていて、大きさは大体高さ20cmぐらいです。みな白磁ですが、高級品ではなく大量生産された容器です。こういうものがキウランだけで数百出ており、ゼーランディアでもとても多く発見されました（図9）。



図9 キウラン遺跡出土の安平壺／筆者撮影

実はこの壺は今から約100年近く前、日本が台湾を占領していたときに安平で大量に発見されました。そのためにこの名前が付いていますが、つくられたのは福建で台湾産ではありません。しかし台湾の安平で大量に出てきたためにこの名前が付いており、台湾の地名の付いた唯一の陶磁器です。これは非常に大きな特徴があり、上と下の二つを別々に作って接合する方法で大量生産されています。普通の陶磁器は極端に大きいものを除いて上から下まで一緒に作りますが、安平壺は上下を接合する方法です。また、内側にも釉薬がかかっています。普通このような壺は口が小さいので、内側に釉薬をつけるのは簡単ではありません。しかし安平壺は例外なく内側がそのような状態になっており、気密性が高くつくられています。そのことから考えて、最初の段階で液体を入れることを想定した容器であった可能性がとても高いと言えます。

この安平壺は広く分布していますが、重要なのは日本の熊本県天草下島の崎津小高浜で出てきた例です。私が知る限り、これが唯一、中のものが一緒に発見されました。現在、天草切支丹館に展示されていますが、この安平壺の中から出てきたのは小さなロザリオと指の先ぐらいの小さい人物像です。ロザリオとセットになっていたため、この人物像を天草切支丹館ではマリア像と説明しています。つまり、この天草で偶然発見された安平壺には、カトリック信仰関係のものだけが入っていました。

もう一つ日本の例ですが、原城跡発見の安平壺があります（図10）。原城はよく知られているように、島原の乱の最後段階でキリシタン軍が籠城したところです。そこでの発掘調査で、典型的な安平壺が出土しました。原城の陥落が1637年であるため、これがそれより以前に運ばれたことは間違いなく、年代がはっきりしている例で2番目に古いものです。キリシタン一揆軍の籠城以前に原城は有馬氏によって築かれ、有馬氏もかなり貿易をやったことは確かです。そのため有馬氏時代の可能性もありますが、有馬にしても一揆軍にしてもカトリックであることは共通しています。



図10 原城跡（左）出土の安平壺

筆者撮影

日本で安平壺が出てくる遺跡は極めて限られていて、大部分が長崎県です。ほとんどカトリック関係の遺跡で、非カトリックというのはほとんどないでしょう。これが日本の特徴です。カトリック教徒が

何らかの事情で日本に持ってきたものになります。

しかし、そうでないものも他の地域にあります。一番古い年代の発見例は、マニラ沖で沈んだサン・ディエゴ号というスペイン船に入っていたものです。スペイン船なのでカトリックといえばカトリックですが、このサン・ディエゴ号はオランダ艦隊との海戦で沈んだ船です。実際にはメキシコへ向かういわゆるガレオン船で、大量の貿易品を積んでいました。その中に陶磁器の容器もたくさんありましたが、そこに2個の安平壺が含まれていました。これはかなり大きいもので、30cmぐらいの高さがあります。

しかしここで注意したいのは、2個という個数です。この船から出てきた陶磁器の容器は全体で数百ありましたが、安平壺はわずか2個でした。これはとても少ない例で、先ほどのティルタヤサの近くにあるバンテンの王城跡から出てきた安平壺は、私たちが20年ぐらい前に調査した時に大きな破片だけでも数百ありました。

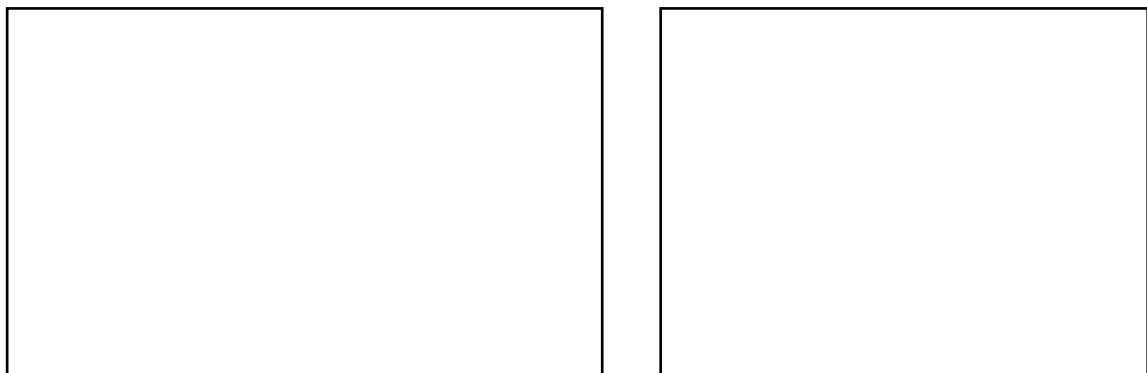
この安平壺は、17世紀を中心とする東南アジアの遺跡では普遍的に出てきます。簡単にそれを紹介すると、ベトナム中部のホイアン、あるいはスラウェシ島南東部のブトンや南部のマカッサル、そして今示したバンテン、さらにスマトラ北端アチェのロスマウエなどの遺跡があります。私を知る限り一番遠いのは、スリランカのゴールです。つまり南アジアから東アジアに至る、かなり広いアジア東半分の17世紀の貿易関係遺跡では普遍的に出ています。この地域の骨董屋へ行けば、どこへ行ってもかなり安く売られています。私は買ったことはありませんが、とても普遍的にあるので値段が低くなっています。果たして最初の中身が何かということが大きな問題ですが、それは時間の関係で省きます。

## 4 後期時代（17世紀末～19世紀）

### 4-1 後期1（18世紀）

後期は、簡単に見ます。キウラン遺跡の時期は、19世紀まで続きます。例えば外側が褐色の釉で、内側を染付にした陶磁器が一点キウランで出ています。これはバタヴィアウェアといわれる種類ですが、景德鎮でオランダの注文に応じてつくられたといわれています。バタヴィアでたくさん出てくるため、バタヴィアウェアと呼ばれていますが、18世紀初めころの年代です。そして18世紀に福建の徳化（デーファ）窯でつくられた粗製大量生産青花（染付）の鉢や小さい碗も、キウランでは少なからず発見されています。

また高雄の左營遺跡は城郭都市で、城壁で囲まれていました。そこでの発掘でも、安平壺そして18世紀の福建産の青花などがたくさん出土しました（**図11・12**）。台湾で1787年に、林爽文（リン・シュアンウエン）という福建人が清朝に対して大反乱を起こしています。これは清朝統治時代における3大反乱の最大のものですが、このときに左營の城郭は反乱軍によって占拠されて以後一度廃棄されています。そのため、出土陶磁は基本



**図11（左）** 左營鳳山県旧城遺跡出土の徳化窯系青花碗／劉益昌教授提供

**図12（右）** 同特有種類／劉益昌教授提供

的にこの反乱より古いこととなります。

少しだけそれを紹介しますと、同じような徳化窯などの福建産の粗製のいろいろな碗が大量に出てきています。そこには他の地域と共通して見られる一般的種類と、あまり類例の多くない種類があります。

一般的種類のものは、同じ時代のアジア各地の遺跡で共通して出てきます。一つの例を見れば、北部ベトナムにフォーヒエンという代表的な港町があります。紅河のもっとも南側の支流に沿った貿易港ですが、そこでも左營遺跡と似た構成の福建産粗製青花碗が大量にごみのように出ています。

## 4-2 後期2 (19世紀)

19世紀にも、やはり福建産の粗製の陶磁器が運ばれ続けます。台北の北側にある淡水(タムスイ)で出てきたのと似た陶磁器が、ベトナムのフォーヒエンでも出土しています。文様は喜ぶという字を二つ書いた双喜文で、華人社会で幸福の意味を示す縁起の良いものですが、とても雑に書かれたものが出ています。

このような碗はいわゆる貿易陶磁ではなく、華人たちがあちこちに移住していく中で自分たちの食器を持って行ったものだと思います。19世紀には、日本では長崎を中心にですが、世界の陶磁貿易は大きく変わりました。ヨーロッパ産の産業革命で生まれた陶磁器が急速に力を伸ばしていき、どこでもたくさん出てきます。しかしそういうものが台湾ではほとんどないことが、大きな特色と言えます。

別の例では、シンガポール川の河口も調査されました。そこでも同じような福建産の粗製陶磁器が出ています。この時代にシンガポールへ華人が大量に移住していったことはよく知られていますが、やはり彼らが持参したものと私は考えます。

陶磁器以外に台湾の19世紀で注目すべきは、キウラン遺跡で出た銅銭です。それまでは中国清朝の銅銭が大部分でしたが、この時期になるとベトナムの銅銭が大量に入っています。18世紀のレ朝後期や18世紀末のタイソン朝時代の銅銭です。これらを含めてベトナムの銅銭が、大量に台湾に入りました。日本が台湾支配を始める1895年直後に、台北周辺でどのような銅銭が流通しているかを調べています。その結果を見ると、流通していた銅銭の5%近くはベトナムのものでした。

これはそれまで清朝が支配していたことを考えると、とても驚かされる事実です。清朝というのは中国文化を代表することで、台湾支配を継続させていました。われわれには銅銭の銘が何という時代かは全くどうでもいいことですが、漢字文化圏の人たちにとっては命より大切な標識です。ベトナム銭はもちろん公式には贋金になり、清朝皇帝の年号が入ったものが正式な通貨です。にもかかわらず、流通していた5%近くがベトナム年号の銅銭だったということは、清朝支配の実態を示す非常に大きな証拠と言えます。こういうことが日本統治時代の直前に起きていました。

## 5 終わりに

台湾関係の船として多分あまり知られていないですが、最古の絵は1673年の『長崎寛文屏風』に描かれた船と考えられます。キャプションがあり、上がひらがなの「と」、次が「う」、3字目は読みにくいですが、最後が「い」です。おそらくこれは「とうねい」だと思います。「とうねい」というのは「東寧」のことで、鄭氏が台湾を名付けた東寧を指していると思います。『長崎寛文屏風』はイギリス船リターン号が来たときの事件を主題にしていますが、そのときに東寧船がいたことが分かります。

またよく知られているのは18世紀の松浦史料博物館に残る数多い『唐船図絵』の1枚で、はっきりと台湾船と書いてあります。両方を比べると、構造的に大きな差はありません。

ん。19世紀になるとジャンクはこのような大きな船がなくなり全く違ってきますが、これら17世紀の船と18世紀の船はほとんど変化がありません。

17世紀の船は「とうねい」と書いてあり、台湾はこの時に鄭氏時代であるため、長崎に来るのは自然に理解できます。しかし18世紀の松浦の絵の場合、この時期の台湾は清朝に支配されていて独自の貿易などしていなかったと普通考えられています。にもかかわらず、この船には少なくとも長崎へ来る前の出発点は台湾だと書いてあります。そういう点を見ても18世紀の清朝時代でも、台湾が貿易活動をやめたことはないと考えられます。

簡単にまとめますが、台湾には文献記録が多くありません。特に前期はほとんどないため、陶磁貿易の証拠は歴史を考える重要な要素になります。前期の場合、フィリピンと非常に歴史経緯が似ていますが、陶磁貿易は若干違います。それがなぜなのかに大きな意味があると思います。特に15世紀の陶磁器がありません。この時期に琉球は大きく発展しますが、その影響がなぜ入らなかったのかも大きな問題です。

続く中期の中心はオランダと鄭氏の時代ですが、その前段階の海賊時代も含めて非常に活発に貿易がされています。16世紀中頃に突然始まりますが、大きなつながりがインドネシアなどの東南アジア島嶼部とあることも注意を要します。

また後期になると松浦の絵にもあるように、この時代にも陶磁貿易の網は確かに台湾に及んでいたことが重要です。その中でベトナムとの関係が、最後はこれだけになってきますが、非常に強かったこととなります。逆にヨーロッパ的なものの受け入れが弱いことも大きな特徴です。

最後として、何回かお話したキウラン遺跡に住んでいたのはカバラン人という原住民（先住民）ですが、かつて高砂族と呼ばれた人たちの一部です。彼らが陶磁貿易に積極的に関与していた点が非常に重要です。カバラン人がいたのは東海岸で、そこは直接大陸に面してはいません。にもかかわらず大量に陶磁器を持ち、しかも一程度は東南アジア陶磁器でした。

ところが、福建ではタイの陶磁器などの報告が全くありません。あるいは発見されていても認識されていないだけなのかもしれません。ただ現段階ではないとしか言えないですが、逆に言えばタイの陶磁器は福建人ではない人たちが持ってきた可能性があるのかもしれないです。あるいは琉球人かもしれないです。その点も含めて、非漢民族の果たした役割をもっと見直す必要があるのではないかと考えます。

時間がだいぶ超過してしまいました。どうもご静聴ありがとうございました。

## 質疑応答

**フロアA**：お話ありがとうございました。私は東南アジアを専門にやっているのですが、西アジアや南アジアとの関係に関心がありますので、その方面でお聞きします。

一つがイスラーム青釉とありますが、イラン産だったとのお話があって、台湾ではないけれども、フィリピンではあるとのことでした。唐代末の頃だと、ちょっと微妙な時期だと思います。唐代の多様性は分かりますが、それ以後との、要するに海洋的なルートがいつ頃できたのかにすごく関心があります。フィリピンにあった、他にも東南アジアでも入っているようですが、イラン産の陶磁器、それが結局、東西の陸路から入ってくるのか、海路から入ってくるのかをまず伺いたいです。

**坂井**：それは非常に極めて重要なことですが、陸路の可能性はまずないでしょう。というのは、東アフリカのスワヒリ世界を含むインド洋世界および東南アジアから東アジアという広範囲な地域のほぼ全域で、イスラーム青釉が同時期に出てきます。日本では福岡の鴻臚館があり、東南アジア内陸ではハノイのタンロンやアンコールのロリュオスという出土地があります。あるいはスリランカのマンタイやパキスタンのバンボールなどの港湾遺跡でも出ています。そしてスワヒリではケニアのラムーでの出土があるように、一挙に各地で出てきます。

そのほとんどの例は、インドネシアのピリトゥン島沖で発見された沈没船がもっとも良い例ですが、現在でもアラビア海で動いているダウ船がもたらしたと考えられています。ジャンクではなく、ダウ船です。そこから中国産の唐代後期の陶器と共にイスラーム青釉も一緒に出てきます。

そういうことから考えて、フィリピンでも恐らくその流れの一環として貿易を行っています。この大きな流れが、急激に9世紀から始まっています。なぜ9世紀が分かるかといえれば、イラクのサーマラーでの出土によってです。これはアッバース朝の9世紀代60年間ほどの首都ですが、そこが出発点になることは間違いないため、そのように考えられます。

**フロアA**：私も恐らくそうだと思っていたのですが、それでアラブ人とか、イスラームという非常に漠然とした言い方をされるときもあるけれど、はっきりペルシャ人とおっしゃられました。その根拠はどのようにお考えでしょうか。

**坂井**：具体的に何か直接証拠があるから、ペルシャ人だと言えるわけではありません。しかし陶磁文化の流れから見ると、ウマヤッド朝の頃の確実な陶磁器は確認できません。それがアッバース朝になって、初めて現れます。そしてその後ペルシャ世界、広い意味でのペルシャ世界のみで連綿とイスラーム陶磁製作文化が広がり、技術は発展していきます。それ以外の地域は非常に限られています。

そのため陶磁器があれば、それはやはりペルシャ人世界と考えた方が良いでしょう。だいたい後の例ですが、14世紀初めに建てられたモスクが泉州にあります。この泉州モスクは中国の漢族地域では唯一、ペルシャ風の建築要素を持っています。これも同じイスラームでもアラブ地域には本来ない要素なので、それも含めて、やはりペルシャ人と考えた方がいいのではないかと思います。

## 参考文献

- 坂井隆 2012（王淑津訳）「大員、安平輝煌の時代 從安平壺談17世紀亞洲貿易網路中的「大員」」『典藏古美術』238、96-103頁
- 坂井隆 2014「東南アジアと台湾における中国系錢貨の使用」『東南アジアにおける出土錢貨の考古学的研究』発表資料、東京：淑徳大学
- 坂井隆編 2000『バンテン・ティルタヤサ遺跡発掘調査報告書』、東京：上智大學アジア文化研究所・インドネシア国立考古学研究センター
- 國立歷史博物館 2003『澎湖 内垵中屯 歷史考古研究成果報告』、台北
- 謝明良 1996「左營清代鳳山縣舊城聚落出土陶瓷補記」『臺灣史研究』3-1台北：中央研究院台灣史研究所籌備處
- 陳有貝・邱水金・李貞瑩編 2008『淇武蘭遺址搶救發掘報告4遺物篇（上）』宜蘭縣立蘭陽博物館
- 劉益昌・王淑津 2015「變局之前的對外接觸－臺灣出土10-16世紀中國陶瓷及其意義」、台北：中央研究院歷史語言研究所104年度第十四次學術講論會配布資料
- 臧振華等 1993「左營清代鳳山縣舊城聚落的試掘」『中央研究院歷史語言研究所集刊』64-3、763-865頁、台北：中央研究院歷史語言研究所
- Chang Hisu-jung, Farrington, Anthony, Huang Fu-san, Ts'ao Yung-ho, Wu Mi-tsa (ed.) 1995: *The English Factory In Taiwan 1670-1685*, Taipei: National Taiwan University

貿易陶磁と文献史料から東アジア・東南アジアの歴史を考える